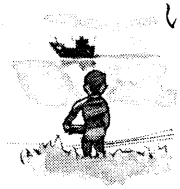
子どもの生きがい

桝田正子



子どもの生きがいについて考える時、言語表現の未発達な乳幼児の場合は、子どもがその生きがいの内容を言語によって表現することはもちろんないし、「とってもうれしい」とか「すばらしい！」とか、充実した自己を感じた瞬間の心おどるような状態を表現する子どものことばを、我々がとらえることも、非常にむずかしい。しかし、だからといって乳幼児には生きがいがないということでは決してない。多くの母親はなかば確信に満ちた直感で、自分たちのおさない子どもにも生きがいがあるということをいえるにちがいないし、私もそういう母親のひとりである。我々母親の、このような確信を裏づけているのは何であろうか。その判断の基準となるのは、子どもの豊かな表情や目のかがやき、かたことことばの中の感動的な声の調子などである。これらがいっしょになって、子どものあの生き生きとした状態をつくり出し、それを我々母親は生きがいのある子どもの姿としてとらえるのである。

それではいったい、乳幼児はどのような生活経験の中で、その瞬間に存在することをよろこぶ体験をし、生き生きとした状態を見せるのであろうか。ここでは一歳九ヵ月のMの生活の記録を通して、乳幼児の生きがいを考えてみたい。

――期待をもつこと――

Mは、その日出かけていた両親からおみやげに水車のおもちゃをもらう。

まだ水を通して遊ぶおもちゃとは知らず、水車の部分に手をかけ力を入れてグルッとまわしては「グュグュ（ぐるぐるの意）、グュグュ」といって、いかにもおもしろそうにニコニコして楽しんでいる。時々水車がいきおいよくまわると、「ほら、グュグュ」と同意を求めるようにおとなの顔を見上げる。そろそろ寝る時間である。

母「ほんとね。よくまわるのね。よかったわねえ。……

じゃあきょうはもうねんねの時間になったから、そのグルグルはあしたの朝までソーッとおいといて、あしたの朝起きたら、また遊びましょう」

M、母の指さしたたなの上にそっと水車をおき、パジャマに着かえて寝に行く。

翌朝、めずらしくきげんよく目をさまし、一人で二階からおりて来る。（ふだんは寝おきが悪く、たいてい、目をさますと泣き声をあげて母親を呼ぶ）開口一番、「グユグユは？」といいながらへやの中を見まわす。昨夜自分がおいたたなの上に水車を見つけると「あった！」とさけんで、目をかがやかして水車をおろし、早速前夜のように手でまわして遊び始める。

その日一日、Mは思い出したように、時々水車を持ち出しては手でまわして遊ぶが、すでに、前夜初めてこの玩具を手にした時のような興味の示し方ではない。夕方になって

母「このグルグル、ここにお水入れたらおもしろいかもしれないわね。あとでお風呂でパパと（Mはいつも父親と入浴する）遊びましょう（中略）」

父「さあM、お風呂にはいろう」

M「グユグユ持ってっていい？」

父「いいよ」

M「キャー」というような歓声をあげ、水車を持って、よろこびいさんで入浴に行く。

――期待が受け入れられること――

Mは水遊びが大好きである。洗面所の洗面台の前にいすをおき、それにのって水道をジャージャー出して、洗面器にたまった水を何度でも移し返す。ふだんおとながついていない時は、危険なので洗面所の戸を閉めておく。が、ついていられる時には開放する。

洗面所の戸を開閉する音がする。積木で遊んでいたMはその音をききつけて、洗面所にとんで来る。

M「ジャージャーする」

母「じゃあ、いきましょう」

M、よろこびいさんで食堂からいすを運んで来て洗面台の前におき、その上に乗る。

M「いい？　いい？」と水道の栓に手をおき、よろこびいっぱいの顔をして母親にきく。

母「いいわよ」

M、水道の栓をひねり、じゃ口から出てくる水に手を打たせながら、「ウフッ、ウフフ」とうれしさで思わず

出てきてしまったというような声をあげる。
M「見て、見てママ。ほら、ジャージャー」
母「ほんと、つめたくていい気持ねえ」

――成就感、成功感を味わうこと――

M、チャイルド・ツール（組み立て積木）の車軸を、車にさし込んでとめようとするが、左方向にねじるのでいっこうに車がとまらない。二、三度失敗をくり返したのち、だんだん乱暴に操作するので、なおさらうまくいかない。
M「できないィ」と車軸と車を投げ出し、床に頭をこすりつけてくやしそうに泣き声をあげる。
母「何ができないの？」Mの妹にミルクをのませながらゆっくり声をかける。
M「これ、これつかないの。ママやってェ」
母「M、もう少しそおっと、ゆっくりしてごらんなさい。お手々反対側にグルグルまわすのよ」
M「できない、できなぁい」くやしがって床を手でバンバンたたきながら泣く。
母「それじゃ、Mのできるのはどういうのかな？」
M、母親のことばに急に顔をあげて泣きやみ、手もとにあった短い車軸を持ち上げて、
M「これ」
母「そう、それならきっとできるでしょうね、ママ見ててあげるわ」
M、短い車軸を車にさし込み、さっきと同様、左方向にまわそうとする。母、無言でMの後方からMの手に手を添え、右側方向にねじるようにやや力を入れて手をはなす。M、右側方向に車軸をねじり、車軸と車がくっつく。
M「できた！」と成功の声をあげる。
母「わあM、できた。よかったわねえ」
M「M、もうひとつつけるの」
母「そう、してごらんなさい」

年齢が大きい子ども、あるいはおとなの場合は、何かの目標をもち、それを達成するための手段となる行動をしている過程に充実した自己を感じることができたが、生活経験の浅い年齢の小さい子どもにあっては、自分の中に目標といえるほどはっきりとある状態を設定することはあまりないし、またそれに向かって行動をコントロールしていくこともほとんど不可能である。

乳幼児の場合は、周囲のいろいろなことに興味をもって自由に活動している中で、非常に少さいサイクルではあるが、次々と種々の活動の期待が生じ、(最初の例は期待の継続する時間が長いが、ふつうはもっと短時間である)その期待が偶然、あるいはやや意図的に実現されるという体験のくり返しが、子どもに大きなよろこびを感じさせ、さらに活動的にさせて生活を充実させているように思われる。この、乳幼児がもつ活動の期待は、必ずしも結果を予想したものばかりではない。つまり、何がどうなるかはわからないが状況に何か変化がおこりそうだ(あるいはおこせそうだ)、新しい展開がありそうだ、というような漠然とした期待もまた、乳幼児の心をワクワクさせる要素を充分にもっているようである。

なぜ乳幼児はそのように、たえずいろいろな期待を生み出して活動することができるのであろうか、まわりのおとなとして、その姿が乳幼児の生きがいであると思わせるほどに生き生きと意欲的なのであろうか。それは、発達の過程にあって、精神的にも身体的にもひとつの段階にとどまっていることがない乳幼児にとっては、たとえ同じような場面で同じように行動しても、その展開する状況を受けとめる際に、新しい認識や新しい発見があり、その新鮮さの体験が自らの可能性をひとまわり大きくする体験とつながって、子どもに非常に快適なよろこびを与え、さらに期待を求めようとさせるからであろう。

一方、このような子どもをとりまく我々おとなたちは、子どもに生きがいのある生活をさせたいと考えながらも、はたしてそれを助成するように動いているだろうか。

乳幼児は家庭内での生活が多くしかも探索の欲求が強いから、その行動はしばしばおとなの都合とぶつかることがある。水遊びがしたくて水音のする所へかけ寄って来る子どもを見て、床を水びたしにされてはたいへんとあわてて水道栓をきつくひねって、子どもの興味をそらそうとしたりすることはないだろうか。新しいもの(こと)に対する意欲や適応力が豊かで、自らを拡張するエネルギーを最も多くもっているこの時期の子どもを、固定的で形式的なおとなの生活のものさしで判断し、制限していることはないだろうか。私を含めて、乳幼児と生活を共にする母親は、どうしたら子どもが自らを大きくするような状況をつくってやれるかということについて、もっと真剣に考える必要があると思われる。子どもの生き生きとした姿にふれることが、また母親自身の生きがいのひとつでもあるのだから……。